

説教 『一つなる祈りの力』山本 護 牧師  
聖書 出エジプト記 34：27～29／使徒言行録 1：12～14

「イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、40日にわたって彼らに現れ、神の国について話された(使徒 1:3)」。十字架で確かに死んだ後、復活して弟子たちに 40 日間教えた。そして弟子たちに「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる(1:8)」と告げた後、弟子の目の前で天に昇って雲間に消えた(1:9)。

「40 日の神的な顕現」から、あのモーセのことが思い起こされる。シナイ山でモーセは主の言葉に基づいた契約を結んだ(出エジプト 34:27)。「モーセと主は共に 40 日 40 夜、そこにとどまった。彼はパンも食わず、水も飲まなかった。そして十の戒めからなる契約の言葉を板に書き記した(34:28)」。神と民との確かな絆が成立すると(34:27)、モーセは神の領域である山から民の中へ下りた(34:29)。モーセの顔が光を放っていたのは(34:29)、天なるものが地に現れた象徴だろう。手に持った掟の板に記された十戒は、人間の文字でありながら、そのまま天の啓示であった(34:28)。啓示の本体は、光を放つ顔ではなく十戒にある。つまり天の御言葉は、私たちが理解しうる地上の言葉に受肉した。

天の御言葉は地上に降った。40 日の間に記された十戒は地上にもたらされ、民の中に広がり、民にとってもっとも太い根となった。千数百年後、人間となった御言葉(ヨハネ 1:14)は、死んで蘇り、人間の姿で 40 日間弟子たちを教え(使徒 1:3)、天に昇った(1:9)。モーセとキリストによる 40 日間の教えは、地上に広がる天の言葉であった。この御言葉はどのように広がり、どのように根づくのか。

天に昇るイエスを見つめて呆然となった使徒たちは(1:10)、何が起きているのか分からないまま、「オリーブ畑」と呼ばれる山から、宿の「上の部屋」に集まった(1:12~13)。「オリーブ畑の山(ルカ 21:37)」や「二階の広間(22:12)」という関連から、最後の聖晩餐が連想させられる(22:15~20)。イエスを思い起こす広間には、ユダを除いた使徒全員(使徒 1:13)、婦人たち、イエスの母マリア、イエスの弟たちが集まった(1:14)。婦人たちとは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、その他だ(ルカ 24:10)。

集まった者たちは、気が合う世俗の仲良しではない。ただキリストに結ばれた者たちだ。彼らはキリストを中心にし「心を合わせて熱心に祈っていた(1:14)」。ここに集められた者たちは皆一様に俗物で(マルコ 3:31~35, 10:35~37, 10:41, マタイ 20:20~21)、今日の教会と変わらない。ところが「心を合わせて熱心に祈る(使徒 1:14)」集団であったがゆえ、結果として性別や階層を越え、価値観や好き嫌いを越えていた。すごいことだ。俗物が高潔になるのではない。俗物のまま、囚らずも世俗を超えていく。

当局に監視され、使徒たちの宣教は制限されていた。その代わり教会の迫害者だったパウロが、広く御言葉を宣べ伝えた。パウロは祈られて出発する(13:2~3)。その偉大な働きは「心を合わせた熱心な祈り(1:14)」に支えられていた。八ヶ岳伝道所も数多の祈りを戴くことで存在している。同時代の人々に祈られ、遡ってパウロと使徒に祈られ、イエスとモーセに祈られて、私たちはここに存在する。



#### 【おまけのひとこと】

雨あがりの水たまりに青空が映っていた そうか天は 頭をあげた上空にあるのではない  
水たまりの穴から垣間見た地の底に天はある 祈りは地を支えている 天の響きで キリストの響きで